

すべからず嗚呼先生復世に出でたまはざるか其道學に於ける其治國の政に於ける之を現世に求むるも得難し其書に對して其人を追想すれば身先生に對するが如く心爽然として又一の感なしみぬ世の人を友とすと云は蓋是を之謂なるか千古由來學に淺く爲に世の樂を不知然れ共亦時に此樂あり此樂や心なき人の想像し能はざる所又實を以て代ふべからざる所なりさはあれと感を同ふするの人蓋多かるべしまかも我心を知れるものは獨此夜の月かげのみ

附云先生の心法は和書六卷にいと詳に見えたれど今いはず又先生經濟の學山川の治に達したまへる事は世既に定説あればこれも亦いはず今右にのべし所は當に思ひ當りま一ふしにすぎず言ひたさ事も多けれどかの月の笑はん事の耻しさにえもかまはず見ん人心してかな

消 夏 斷 片

狂 波

○行旅中佐賀縣大野村を過ぐ一婦人の嬰兒を抱くを見る其の容貌愛然美玉の如くなり口言はんとして未だ言なきものゝ如き眼眸の明快更に意表に出づ余熟思すること多時然れども嬰兒は依々として婦人の膝に横はるを見る何ぞ知らん之れ一の人形ならんとは

○余の小兒に對する愛泉に至りては熱天之を潤すこと能はず害物之れを遮ぎること能はず唯だ一時其の迸線を遮斷することあるも源泉の滾々たる其の支流豈溢れざるを得んや童子之が爲めに馴れ子女之れが爲めになづく苟も其間一點の邪意を存せず我は理性に依りて彼れを導かんとし彼れは其の天誦の得性に依りて來り和せんとす彼れは布ける白露の皎々たるが如く我れは之れを宿す蓮葉の青

翠たるが如し行旅中小兒に會する毎に必ず會釋一番して去る或時は之れを他の聯想に比し又或時は之れを現實に他の理想の片影に對比す然かも其間彼是高低の境界を爲さんとほせず唯だ過去の幻想を想起するのみ

○船小屋は福岡縣八女郡にあり羽犬塚停車場を去ること三十丁含鐵炭酸泉を以て名あり其の分拆の結果に依れば

炭酸多量、加爾基少量、麻屈涅矢亞痕跡、炭酸亞酸化鐵
となりて溶在多量、那篤倫痕跡、加里痕跡、亞硝酸痕跡、有機質痕跡とす

該礦泉を發見せしは今より七十餘年前にして分拆を明にし公認を得しは明治十九年なりと云ふ天然の光景は矢部川に依つて其雅趣を盛にす靈泉沸々として地質を破つて來る浴餘爽然として萬慮正に休す可し泉に臨みて掬すれば澁性あり眞に之れ一浴融然四體伸快如微醉暖如春の趣あり近時來客甚だしく旅舎又備はる獨り怪む白晝猶裝粉の婦横行して旅舎又管弦の音を留むるなきを

○袖振合も多少の縁とぞ云ふ一樹の影豈又多少の縁なからんや白熱腦天を照して地盤悉く沸く發汗切りに發して千流の瀧の如く氣息湍々として又生氣なし脚は己に疲勞して行步甚だ困するのときに於て傍らの樹蔭に憩ふ此時其の瞬時に於ける快味は何を以て答へんか此時清風吹き來りて疲勞せる五体を快復し淋漓たる千流の熱玉を冷やし勞せる脚を醫せしむ嗚呼行旅に於ける天施の賜又之れに勝るものあらん

○夏期休業に際し爲す可く企つ可きの事業多し人は之の期を利用して未だ來らざる創業の基礎を固めんとし或は己に起せる事業の就成を謀らんとし其の主動力たる五体の療養に他意なきものゝ如し

或人は近く家庭團樂の裡に既往を語り未來飽和なる夢を談ずるものある可く或は遠く山野を跋躄して身体の健福を圖り一には講學の實成を勉めんとするものあるべし或は海濤岸を洗ふの邊にありて鳥千鳥に己が胸底を語り更行く空に靜念密々蓮台の尊容を拜せんとするものあるべし期する所は自然の精美に接して遲滯せる紅血の活動を醒起せまひるにあり

○余が當夏期休業中に於て涼を謀るは壺陽にあり地は町を去ること半里海岸に面し一方山を背にす老松鬱蒼として老鷓を棲ましめ庭石は苔蘚を帯びて池面萬龜を住ましむ可し秋草翠を湛えて紅花更に紅なり冬果滋々として枝葉爲めに垂る蟬聲樹間に噪ぎて夏の深さを告げ虫聲唧々として秋曉萌す天然界の變調に依りて天環の移轉を知る園中の光彩更に艶簇たるを見る樓に登りて脚下を眺むれば碧海廣茫銀波溶々として白帆を浮べ點々として恰も白鷗の遊ぶに似たり

若し四面暗黒にして視眸を遮ざるの時に於て遙かに海上を望めば漁火熒煌海面を照し煌々として玻璃の漂ふが如し若し月明に乗じて庭前を逍遙し天然の光景に接せば白露は玲瓏とまて白珠團なり欄に凭り月下に放吟すれば氣宇自ら弘大にして玉鏡愈々團なり誰か謂ふ孤嶋の月と、月を以て斷腸の主物となすもの古來これあり

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋には有らねど

又天の原よりさけ見れば春日なる三笠の山に出で去月かも

之れ古郷愛戀を歌ひしものに非ずや然れども月は必ずしも憂愁を寄するものに非ざるなり其の愁を照すと共に又歡を照すものなり然れども月の靈妙なる天施の閃々たるに至りては歡愁兩ながら着けずと云ふ可し所謂月の月たる精美は茲に在るなり見よ彼の清の許宜映の絶叫する所。

一 種月團圓、照愁復照歡、歡愁兩不着、清影上欄干、

と嗚呼月夜の歡望又樂しきかな

○海風に晒され碧波に浴すること三旬其間閑を得て同志三名杖を白岳に曳く之を導びくもの田友及び梅郎氏となす其の行裝各異なり他友等悉く革鞋草履を穿てども余は獨り下駄を用ゆ之れ余は健脚を誇らんとする野心ありるにあらす一里餘の行程なれば特更他物を撰むの要なきを認めければなり然れども當地は道路の惡きを以て名あり石片各所に散乱し岩石尖元し行歩甚だ惱む余が特に他に異なりて下駄を用ひしもの思へば之れも一のスネモノたらんとするなり各握飯を腰にして行く余は町にて探出せし一本の棒を杖とす蓋し一は身の倚りと爲さんとするにあり途中藩祖公の墓及び招魂社に參し往古の盛衰を思ひ義士が國に盡す忠誠の深さを歎賞し終に山路を迂回えて本道に出づ此の間清泉迸る掬えて渴を醫し一杯を携ふる處の水管に給して進む漸くにして岳麓に出づ仰ぎ見れば斷壁數百尺なり傍らの杉樹の下に一憩して勞を醫す管を取りて一飲すれば熱氣去り快氣生ず杉影冷かにえて氣は秋の如く海灣近く接して波に聲あり終に攀て山嶺に達す海風一掃征衣爲めに輕し石を疊みて外廓となすもの之れ白岳神社とす社内十數人を入る可し之れと相對して目白岳あり石に踞し北天を望めば雲烟糝糊の間渺とえて雲を柵引くものあり之を對壹の二嶋となす逶迤とえて諸岳重疊し万壁の狀を爲すもの之を筑肥の二州となす近く眼下に延蛇たるものを見れば生月、度嶋大嶋鶴嶋等星座數ふ可き玄海洋は水天髣髴の間白浪躍り轟聲高し時漸く移り一同相携えて社内に入り腰間の瓢を出し互に相屬す其の甘味更に異なるを覺ゆ心氣快爽意轄如たり

○某友二名小舟に掉して釣を海上に垂る余は舩量を恐れて行かず時に天油然として墨を流すが如く

大雨陰然盆を覆すが如し其の行くに當りては意氣天を呑まんとし歸るに當りては寂々とて喪狗の如し一枚着物を雨に濕したる爲め毛布或は洋服を着る而して其の語る處を聞けば曰く狂没は惡運の強き奴なりと」

文苑

紀念會詩歌

寄松祝

八波則吉

もろ聲にいさたへなん立田山まつのみどりのふかきめくみを
大御代のふみのはやしの若松はさかえゆくへし千代も八千代も

第七回紀念會祝歌

吉九一昌

大君のめくみの露のうれしさはわれ身ひとりと思ふばかりを
かしてしと今日こそ祝へ諸共に文よむまどをうちはらひつゝ

祝第七會紀念會

木村晋次郎

創業以來既七年。時清文運日隆然、鱗々層閣連雲勢、濟々多才出壑泉、
所極東西天地理。攸期内外古今賢、請看異日邦家任、總在青衿八百肩。

全

石川重治